

# 経済学史学会ニュース

The Society for the History of Economic Thought Newsletter

No.41

January 2013

## 幹事会報告

2012年11月17日(土)に、東洋大学において、常任幹事会の後、2012年度第2回幹事会および2013-14年度新幹事会が開催されました。両幹事会の報告事項および協議を経て承認された事項は以下の通りです。

### 2012年度第2回幹事会 報告事項

#### 1. 事務局報告

- ・これまで『経済学史研究』に対する補助金を申請してきた学術振興会の研究成果公開促進費(学術刊行物)の内容が大幅に変更になり、学術刊行物に対する助成が廃止されたので、国際情報発信強化という項目での5カ年計画の応募申請を行った。
- ・会員異動(退会者は7名)。詳細は8ページをご覧ください。

#### 2. 各委員会報告。詳細は5ページをご覧ください。

#### 3. 日本経済学会連合報告。詳細は7ページをご覧ください。

#### 4. 幹事・監事選挙管理委員会報告

2013-14年度幹事・幹事選挙結果について、久保真選挙管理委員会委員長より、幹事32名、監事2名が選出されたとの報告があった。選挙結果は2ページをご覧ください。

なお、選挙結果報告にあるように、監事選挙において第2位得票者が複数出たことへの対応について、監事は西から一名、東から一名選出されるのが慣例であるとの指摘があった。これに対して代表幹事より、そのような慣例は内規にも明記されていないため、代表幹事に対する内規第11条を準用したこと、そのような慣例を内規に明記するかどうかは今後検討したいとの回答があり、今回の選挙結果が了承された。

選挙管理委員会からの補足事項として、①被選挙人の確定のために選挙の公示に先だてて全会員に被選挙人名簿の事前送付を行ったこと、②前選挙管理委員会からの提案を受け、投票率を上げるために、返信用の郵便代金を学会負担とし、メーリングリストを通じ

た投票呼びかけを行ったことの2点の説明があり、③監事についても第2位得票者が複数の場合の当選者決定方法を内規に明記することが提案された。投票率向上のための方策および関連内規の整備については、幹事会でさらに検討することとした。

#### 5. 組織検討ワーキング・グループ報告

八木紀一郎組織検討ワーキング・グループ委員長より、答申と参考資料1~3が代表幹事に提出された。

### 審議事項

#### 1. 組織検討ワーキング・グループ答申について

(2012-14年度新幹事がオブザーバーとして参加することを承認した。)

組織検討ワーキング・グループから答申に関する説明を聞いた後、答申および答申の解説を、栗田代表幹事の前文を付けて、全会員に郵送することとした。

答申に対する対応を検討するために、今年度中に臨時幹事会を開催することを確認した。

#### 2. 新入会員

2名の新入会員の入会申し込みを承認した。詳細は8ページをご覧ください。

#### 3. 2013年度第77回大会プログラム

西沢保大会組織委員長よりプログラムに関する提案があり、これを承認した。プログラムは3~4ページをご覧ください。

2014年度第78回大会の共通論題を「女性と経済学」とし、副題等は共通論題委員会を立ち上げて、詳細を詰めることとすることが提案され、これを承認した。

#### 4. 第78回大会開催校

2012年度中に開催予定の臨時幹事会において開催校を正式に決定することを承認した。

### 2013-14年度新幹事会

#### 審議事項

#### 1. 代表幹事の選出

代表幹事選出の選挙を行い、堂目卓生会員を経済学史学会2013-14年度代表幹事に選出した。

## 2. 常任幹事（各種委員会委員長）の選出

常任幹事選出の選挙を行い、池田幸弘会員（大会組織委員長）、江頭進会員（企画交流委員長）、坂本達哉会員（学会誌編集委員長）、新村聡会員（英文論集編集委員長）、若田部昌澄会員（研究奨励賞委員長）を常任幹事に選出した（なお、常任幹事の担当は、欠席者がいるために後日確定することとしたが、上記のように確定した）。

## 3. 関源太郎会員からの幹事辞退の申し出を承認した。

### 報告事項

#### 1. 組織検討ワーキング・グループ答申

継続性を担保するために、幹事会と合同で、八木紀一郎組織検討ワーキング・グループ委員長からの答申に関する説明を受け、議論した。

## 次期幹事・監事選挙 結果報告書

### 選挙管理委員会

久保 真（委員長）

太子堂 正称

益永 淳

標記選挙（2012年9月5日告示、10月5日投票締切（必着）、10月12日開票（於嘉悦大学））の結果を以下のとおりご報告いたします。

#### 幹事（32名、敬称略）

赤間道夫	荒川章義	有江大介	池田幸弘	出雲雅志	伊藤誠一郎
井上琢智	井上義朗	江頭 進	江里口拓	川俣雅弘	久保 真
栗田啓子	近藤真司	坂本達哉	佐々木憲介	佐藤方宣	関源太郎
太子堂正称	高 哲男	竹永 進	只腰親和	堂目卓生	中澤信彦
新村 聡	西沢 保	原田哲史	深貝保則	御崎加代子	八木紀一郎
若田部昌澄	若森みどり				

#### 監事（2名、敬称略）

上宮正一郎 米田昇平

#### ※註記

- ① 郵送投票数：101、学会会員数：685名（6月12日現在）、投票率：14.7%（前回9.1%）
- ② 幹事選出数：32、第29位得票者が4名のため。
- ③ 監事選挙（会則第16条により2名を選出）における第2位得票者が複数の場合の当選者決定方法が会則・会則内規によって定められておらず前例も不明であったため、9月24日栗田代表幹事に照会し、内規第11条を準用し年長者を当選者とする事が確認された。開票日、幹事当選者を除外した上で監事選挙の集計を行った結果、第2位得票者が複数であったため、年長者を当選者とした。





## 各委員会報告

### 大会組織委員会

1. 来年度(2013年度)の第77回全国大会は、5月25日(土)、26日(日)に関西大学吹田キャンパスで開催されます。  
お寄せいただきました報告希望をもとに、委員会でプログラム案を作成しまして、大会プログラムが別記のように決まりました。
2. 毎年お送りしています報告希望アンケート「報告希望および推薦についてのお願い」を一部変更いたします。
  - (1) 報告希望とともにお送りいただく報告要旨の文字数を、現行の2000字から1200字にする。
  - (2) 現行の返信用葉書を廃止し、「お願い」の文書に同封する報告希望の用紙に記入していただき、メールの添付ファイルないし郵送で大会組織委員会に送っていただく。
  - (3) (2)の詳細、および「お願い」の文意を明確にするための文案の変更については委員会に一任していただく。
3. 再来年度(2014年度)の全国大会における共通論題は「女性と経済学」とし、詳細は共通論題委員会で検討していただくことになりました。  
共通論題委員会はとりあえず松野尾裕、栗田啓子、出雲雅志、西沢保の4人ということにし、関係しそうな方の意見を聞きながら5月の幹事会に向けて大枠を詰めていくことになりました。

(西沢 保)

## 企画交流委員会

委員の交代、前回のニュースから現在までに行われた活動のご報告、そして今後の企画のご案内をいたします。

1. 9月12日から15日、フランス、コルシカ島コルテにあるコルシカ大学にて、ヨーロッパ経済学史学会(ESHET)との第3回合同会議を開催いたしました。テーマは“Crises and Space in the History of Economic Thought”で、合計30名以上の参加者があり、大変盛況でした(日本からの参加者は、12名)。ことに欧州経済危機を背景として、「国境を越えたガバナンスの学説史」を展開したハンス＝ミヒャエル・トラウトワイン教授の基調講演は聞きごたえがありました。なお、この合同会議の準備に関しては特に小峯敦、伊藤誠一郎両委員にご尽力をいただきました。
2. 12月1日(土)、13:00から18:00にかけて、大阪学院大学にて若手研究者育成プログラムを開催いたしました。テーマは「経済学史研究における情報技術活用—テキストマイニングと手稿解析を中心に」で、喜田昌樹教授(大阪学院大学 企業情報学部)と、林晋教授(京都大学 文学研究科)、久木田水生研究員(京都大学 文学研究科)を講師に迎えました。関心は高く、一般会員の参加は16名(うち非定職者8名、定職者8名)ございました。プログラムの詳細につきましては[http://jshet.net/modules/contents/index.php?content\\_id=76](http://jshet.net/modules/contents/index.php?content_id=76)をご参照ください。  
なお、この合同会議の準備に関しては特に久保真委員、それと会場手配などで大阪学院大学藤本正富さんにご尽力いただきました。

3. 北米経済学史学会（HES）との交流事業については、先方の提案を受けて、2013年6月20-22日ヴァンクーヴァーで開催される大会に、こちらからセッションを提供するという話が進んでおります。ただし、現時点ではまだ決定ではございません。11月17日に開催した幹事会での議論と決定を踏まえて、なんらかの形で一般会員からの公募を募るべきという方向は決まっております。

企画交流委員会は事業内容が増えており、今後は業務内容の見直しが必要でしょう。私の任期はこれで終わりです。これまで支えていただきました皆様方に感謝申し上げます。

(若田部 昌澄)

### 機関誌編集委員会

1. 54巻2号の編集作業は順調に進み、現在、初稿の校正が終わったところです。予定通り、2013年1月25日付で発行できる見込みです。内容は、論文4本(英文1)、英文研究動向論文1本、書評15本(英文2)です。投稿論文が少なくなっていますので、奮って投稿してください。
2. 次期編集委員長は坂本達哉会員となります。
3. 今年度に入って、学術文献のオンラインデータベースを有料配信するアメリカのEBSCO社からパートナー契約締結の申し入れがあり、編集委員会では契約を締結する方向で検討してきました。このたび幹事会で承認されましたので、今年度中に契約できるよう準備を進めています。

(田村 信一)

### 英文論集編集委員会

#### 英文刊行企画の募集

- I. [olympass@yahoo.co.jp](mailto:olympass@yahoo.co.jp)宛にまずA4で1枚程度で概要をお知らせください。それに基づいて検討させていただきます。

関連してのいくつかの確認事項です（明確な規定はありませんが、ほぼ次のようなことがいえます）。

- (1) 複数の寄稿者による英文著作であること（単独書ではなく）。
- (2) 寄稿者は、日本人の場合は学会員であること（多少の例外はあるとしても）。
- (3) 海外研究者の参加を歓迎します。
- (4) 日本人と海外研究者の比率は前者が多めの方が望ましい。
- (5) 承認された場合、経済学史学会の名が使える、ならびに編集関連経費（英文のポリッシュが想定されています）が出る、という特典があります。

#### II. 申し込み近況

現在一件申し込みの連絡があり、「概要」が提出されてくるのを待っているところです。受け取りしだい、委員会で審議を行う予定です。

(平井 俊顕)

# 日本経済学会連合報告

平成 24 年度第 2 回評議員会が 10 月 15 日早稲田大学で開催された。

## 報告事項

1. 『英文年報』第 32 号編集経過報告  
本年 12 月発刊予定。900 部刷り、うち 44 か国に 360 部配布予定。
2. 平成 24 年度第 2 次国際会議派遣補助決定報告  
国際公共経済学会に 25 万円の補助が決定された旨の報告がされた。
3. 平成 24 年度第 2 次外国人学者招聘滞日補助決定報告  
日本統計学会に 10 万円の補助が決定された旨の報告がされた。
4. 平成 24 年度第 2 次学会会合費補助審査結果報告  
経営行動研究学会、会計理論学会に各 5 万円の補助が決定された旨の報告がされた。

※なお報告の終わりに、上記各補助について案内を毎年前年度の 12 月初旬に加盟学会事務局に宛てて送付しているが、より積極的に補助申請を行なうよう希望する旨が事務局より発言された。その際に平成 25 年度より以下の変更がなされる(平成 24 年度第 1 回評議員会にて承認)ことに注意が喚起された。

### (1) 国際会議派遣補助募集要項について

- ① 全体予算額を「200 万円→100 万円」に減額すること。
- ② 派遣者への補助金額を(A)25 万円～(G)10 万円の 7 段階にすること。

(2) 第 1 次募集で 3 つの補助のうちどれか 1 つの補助が決定・受領した学会は、第 2 次募集に応募できないことに加え、更に同補助を 2 年以上連続では受けられないこと。

## 協議事項

1. 平成 25 年度事業計画の件  
『英文年報』および『連合ニュース』の発行、ならびに外国人学者招聘滞日補助、国際会議派遣補助、学会会合費補助を行なうことが承認された。  
※『連合ニュース』については、紙ベースから Web ベースに移行させて発行部数を大幅減とすることにより、その直接・間接経費を節約するとともに、平成 25 年度春発刊の 49 号より英語版を作成し、日本語版とともに HP に掲載することが協議され、承認された。  
※出席評議員より、日本経済学会による Web 上での「フリージャーナル」の発行掲載を行なうことの提案、ならびに連合選出評議員のメールアドレスの名簿記載の要望がなされた。前者については理事会で検討するが、後者については基本的に各選出学会への問い合わせに委ねたいとの回答が事務局からあった。
2. 平成 25 年度会計予算、ならびに訂正の件(受取利息予想額)  
会計予算の訂正前と訂正後の資料が提出され、標記の件について受取利息予想額の訂正が協議され、承認された。  
※平成 24 年度第 1 回評議員会で承認を受けた予算中における「受取利息予想額」金額が当初目論見の「50 万円」から「10 万円」に大きく減少することが明らかになったことに伴う訂正。
3. 平成 24 年度会計中間報告  
受取利息額訂正の承認を受け、中間報告が承認された。

平成 25 年第 1 回評議員会は、5 月中旬に開催予定。

(佐藤 有史)

## 会員異動 (2012年11月30日現在)

会員数 685名

(会費別内訳、会員 506名、 院生 57名、 非定職 122名  
なお、郵送物返送者=不明 17名あり。退会希望者 7名。)

### 1. 新入会員 2名

氏名 (フリガナ)	所属	住所	メールアドレス	推薦者	研究テーマ
岩田 佳久 (イワタ ヒサヨシ)	東京経済大			柴田徳太郎 新井田智幸	19世紀英仏通貨論争
王 量亮 (オウ アキラ)	大阪大(院)・経 済			堂目卓生 中井大介	マーシャルの教育論とその成 長論の関連性

### 2. 住所等変更 (省略)



## 部会活動

### 北海道部会

2012 年度第 1 回研究報告会

日 時：7 月 14 日（土）14:00～17:30

場 所：北海学園大学

参加者：13 名

#### 第 1 報告

佐々木憲介（北海道大学）

「イギリス歴史学派の実践的観点」

イギリス歴史学派の論者たちは、事実判断と価値判断は分離すべきであると考えていた。彼らにとって、「何をなすべきか」という価値判断は経済学の外部で行われるのであり、経済学の任務は、その目的を達成するための手段を教えることに止まるのであった。

実践的な問題について、理論派と歴史学派との間に差異が生じたのは、ある目的を実現するための手段に関してであった。1870 年代以降、労働者階級の生活向上を求める社会改良主義の思想が台頭してきた。労働条件の改善や貧困の解消といった目的は、多くの経済学者に共有されたものであり、特定の学派を特徴づけるものではなかった。これらの目的の根底にある究極的な価値について人々の間に相違があったとしても、社会改良を目指すべきであるというレベルの価値については、合意が拡大していた。そうしたなかで、経済学者が問題にしたのは、その目的を実現するための手段であった。しかし、当時の経済学の状況においては、理論的方法は社会改良の主張に適合的ではなかった。労働条件の改善などを実現する手段を示すという点で、道具立てを欠いていたからである。理論派の経済学者が社会改良のための提案を行うときには、その経済理論に依拠することなしに、あるいはその範囲を逸脱する道具を用いて、政策を論じなければならなかった。これに対して歴史的方法は、社会改良に寄与した諸要因を歴史的に探究するというかたちで、社会改良主義と結びついた。

歴史学派と保護貿易論との結合も、当時の状況に依存するものであった。20 世紀初頭の関税改革論争において、カニンガムとアシュレーが保護貿易を支持したために、イギリス歴史学派は保護貿易主義者の集団で

あるという印象を後世に残すことになった。しかし、1870 年代から 80 年代にかけて興隆したイギリス歴史学派の運動は、そもそも貿易政策の転換を求めるものではなかった。彼らは、実践的な主張としては、自由貿易を支持しながら社会政策の拡大を主張していたのである。ところが、彼らのなかの一部が、やがて歴史的状況の変化を認めて保護貿易論に転向した。たしかに、この転向には、「所与の事実の優先性」と「学説の相対性」という歴史学派の観点が関係していた。カニンガムとアシュレーは、歴史的状況が変われば適切な経済政策も変わるという観点に後押しされて、貿易政策に関する主張を変更したのである。

#### 第 2 報告

中澤 信彦（関西大学）

「食糧危機から議会改革へ — マルサスのペイン批判とヒューム・コネクション —」

本報告の目的は、『人口論』第二版第四編第六章「貧困の主要原因に関する知識が市民的自由に及ぼす影響」で展開されたペイン批判の詳細な検討を通じて、1800 年代初頭におけるマルサス思想の歴史的形成の一端を明らかにすることにある。報告は以下の順序で行われた。(1) 先行研究の概観、(2) 『人口論』第二版第四編第六章の前半部分（第 1～9 パラグラフ：ペインの名前が登場するまで）の分析、(3) 同後半部分（第 10～21 パラグラフ：ペインの名前が登場して以降）の分析、(4) 暫定的な結論。

本報告は以下の二つの暫定的結論を得た。その第一は、『人口論』各版の世界観（自然観・社会観）の連続と断絶に関するものである。『人口論』は初版（1798）から第二版（1803）にかけて、大幅な増補改訂がなされたが、第二版から第三版（1806）への改訂も注目値する。第二版から第三版にかけて、自然法則の強力な作用が議論の前面から背景へと後退する一方で、慎慮の妨げ（害悪を緩和する政策の提言）が議論の前面に出てくる。第二版のみに登場する第 12 パラグラフは自然法則の作用と貧者の自己責任を過度に強調しているため、第三版（以降）のマルサスの救貧ヴィジョンと齟齬をきたし削除されるにいたった、と解釈するのが妥当である。本報告は、第二版と第三版との間

の連続と断絶に関して、連続面以上に断絶面を強調するものである。

その第二は、マルサスがペインの生存権思想を批判する際に活用した知的遺産に関するものである。マルサスは、1800～1801年の飢饉と食糧価格高騰が、大衆の貧困を深刻化させ、それが彼らの暴徒化を引き起こし、ブリテンの伝統的な混合国制の破壊、無政府状態へと帰結することを何より恐れた。このような経済的危機と政治的危機との一体的な把握・分析に際して、マルサスはヒュームの議論（エッセイ「ブリテンの政府は絶対君主制と共和制とのどちらに傾いているか」）を参照した。マルサスは人口原理・経済（価格）理論とヒュームの議論を結び付けることによって、革命を防止するための漸進的改革の一つとしての議会改革を主張するにいたった。議会改革は私的所有権の安定と手を携えて、大衆に勤勉と慎慮の習慣を促し、経済的繁栄（食糧危機の緩和）と政治的安定の双方に寄与する。私的所有権の安定が、貧困を引き起こす原因であるどころか、むしろ貧困を緩和するものである、という主張は、マルサスの中庸で穏健な漸進的改革者の側面を端的に表現するものである。

（森下 宏美）

## 関東部会

2012年度第1回部会

日時：2012年7月28日(土)13:30～18:30

場所：慶應義塾大学三田校舎 研究室棟 A 会議室

出席者：42名

「小林昇経済学史研究とその周辺」

今回は、先般ご逝去された小林昇会員にちなんで、表記の論題で部会を開催した。坂本達哉会員、只腰親和会員、小林純会員にご報告いただき、酷暑にもかかわらず多くの会員の参加をいただいた。文字通り熱い議論が展開された。

司会者 千賀重義(横浜市立大学)

第1報告

坂本達哉(慶應義塾大学)

「小林昇における学史と思想史の方法的関連をめぐって」

ぐって」

本報告では、小林昇の「学史と経済史との試行錯誤的往反」という方法論から現代の思想史研究者が学ぶべきことは何かを考察した。当日の報告では十分に意を尽くせなかったが、私の趣旨は以下の諸点に要約できる。第一に、小林はイギリス重商主義、スミス、ステュアート、リストの膨大な研究をつうじて学史と経済史の「往反」を実践したが、「往反」論の中核には「相対化」の方法論があった。それはたんなる文献実証主義や歴史相対主義とは一線を画する歴史・学史・思想史の文脈分析のことであり、小林自身はこれを学史の立場から実践したが、思想史の立場から同じ相対化的方法を採用できるのではないか。小林はいわゆる「大塚史学」から出発したが、とくに小林のステュアート研究の最終成果は、スミスの実物的経済学体系と対等な学史上の地位をステュアートの貨幣的経済学体系にあたえるものであり、そうした学史認識に対応する資本主義の発生史的認識は「大塚史学」からは出て来ないはずのものである。その意味において、小林が力説した学史研究による経済史学の批判的相対化の作業は、そうとは語られずに、実践されていたと思われる。

第二は、より重要な点として、このような相対化的方法を小林が学史・思想史の關係に適用した例外的業績が『重商主義解体期の研究』であったということである。小林は同著において、ヒューム・タッカー・スミスの批判・継承關係を軸として、名誉革命体制擁護の政治的保守主義(ロックの契約説批判)という共通の立場を析出し、重商主義批判としての経済学的進歩主義と政治的保守主義とが両立しうる論理構造を明らかにすることにより、内田義彦『経済学の生誕』が力説した民主的急進主義者スミスという理解を批判したのである。これは、ポーコックらの18世紀思想史研究にも通じる文脈分析の豊かな成果であり、いまなお高く評価されるべき業績である。この場合、小林が経済理論の先進性と政治的保守主義との内的連関の原点をヒュームにもとめた点は慧眼であったが、そのヒューム理解は当時の通説に引きずられて一面的であった。しかし、その不十分さを自覚したかのように、その後の小林ヒューム論はそれを超える透徹した認識(数量説と影響説との「矛盾的併存」説)を示すことになる。報告の最後に、小林がリストとステュ

一トの研究において学史研究の国際化を実践した先駆者であること、晩年の彼が若い世代の研究者に英語による研究発信の必要性をつよく訴えていたことの意義をあらためて確認した。

## 第2 報告

只腰親和(横浜市立大学)

「小林昇におけるアダム・スミス」

本報告の課題は、小林昇における『国富論』理解の進展過程を時系列的に検討することにある。小林の研究は自身が認めているように、スミス・イギリス重商主義・リストのデルタとして総括されるが、イギリス重商主義にせよリストにせよ、その研究の背後にはスミスが絶えず想定されている。従って「小林昇におけるアダム・スミス」というテーマは、小林の全研究を対象とすることが必要とされよう。この報告でそれは不可能なので、小林自身がある時期から『国富論』を解明する上で「最大の手がかり」と認めている、スミスにおける「商業的社會」(以下CSと略記)の概念把握を基軸に考察をすすめる。

1950年代における小林のスミス理解は、大塚久雄の「前期資本と初期資本」というシェーマ、あるいはケインズ的な貨幣的経済理論の視角という観点から、重商主義者とスミスの経済学を比較することが主題となっていて、『国富論』1篇4章冒頭で措定されるCS概念について強い関心はみられない。それに対して1961年に上梓された『経済学の形成時代』では、CSへの明示的な言及が見られ『国富論』体系全体における1篇4章のCSの意義はある程度、自覚されている。しかし、CSとヒューム、ステュアートの近代社会成立史論との関連、従って重商主義の経済学とスミスのそれとの歴史把握での関連がじゅうぶん捉えられてはおらず、CS概念の矛盾的内容についても論じられていない。

1970年代になって書かれた、「『国富論』の学史的位位置」や『国富論体系の成立』では、CS概念が『国富論』を解明する上での最大の手がかりであると明言され、経済学史の流れの中で『国富論』を理解する上でのCSの意味が論じられている。ひとつは、農工分離という形での近代社会展開のヒューム、ステュアートの史論とスミスCS概念の関連性が明示化されたことであり、

更には演繹的科学としての経済学の糸口が経済学史上さいしょにCSによって与えられたことが論じられている。しかし小林はCS概念が経済分析の上で肯定的の意味のみを持ったとは考えない。スミスの言うCSは独立生産者の社会であると同時に資本制社会でもあるような矛盾的性格をもって、「成立と同時に崩壊すべき必然性を内包して」いるからである。このように小林は、プラス、マイナス両方の意味をふくめて、CSを『国富論』解明における最大の手がかりと考えたのである。

## 第3 報告

小林純(立教大学)

「ドイツ経済学史研究と小林昇」

1. リスト論。小林昇はリスト体系を「工業力という妖力」を軸に組んだと見たい。論点に四つ挙げる。
  - a. 国民的生産力の形成：重商主義→スミス(近代化問題として)。
  - b. <農地制度論—準帝国>での農業のおさえ方：英帝国とドイツ準帝国。ここで「工業力の無限膨張の世界は望ましくない」と判断し、農業に再着目して公共性の担い手(ゲマインデ市民)の育成を重視した。
  - c. 空想的性格とドイツの膨張+ロマン主義。
  - d. 小林はリストから「農工商バランス」論をひろっていく。以上からリスト批判として、①ヴェルッテンベルク内での農民植民の可能性を見ずに東方拡大へ：拡張主義、②米露を見据えた英帝国対抗の「準帝国」の夢想、がある。評価点には、①スミスを後方(重商主義論)と前方(自由貿易帝国主義論)から批判しえたこと、②生産力の担い手/人間類型の検出、③(②→)歴史意識、が挙げられる。

リストは可増財(価値の理論)の無限累進を予想させる世界(工業力信仰)に対決を迫られた。彼はこれに信頼し、かつ怖れた。信頼は近代化論の局面に表現された。国家・国民経済の形成を課題とし、便宜的段階論による工業保護育成政策を提唱した。怖れは晩年の「農業再着目」に現われた。小林は1970年代、GNP信仰批判や経済学「生誕」の原罪性指摘をなし、いわばリストとパラレルな面を見せた。また経済学史と経済史の往反の小林自身の主戦場は西南ドイツ農業史であろう。

2. 歴史学派理解。三点挙げる。①小林の理解は「有斐閣標準」（小林・杉原編『新版経済学史』有斐閣、1986）にある。その評価は高くない。知のフロンティア論は「知のフロンティアを拓くとき、深い歴史意識に裏打ちされた視座／概念が生み出される」を基準に、歴史学派はこの要求水準を充たさない、との判定。②山なみ論。柳澤治の批評（『回想小林昇』日本経済評論社、2011）に譲る。③小林昇批判。a. リストの源泉：高橋和男＝アメリカでの吸収（レイモンド対クーパー、リストの奸計、『アメリカ国民経済学の系譜』立教大学出版会、2008）。b. 歴史学派の精査は自己の作業とせず。ここからロッシヤーの位置価の看過や混同（肥前栄一「ユストゥス・メーザーの国家株式論について」『立教経済学研究』65-1, 2011。Hansen/Hanssen (21 頁) が生じた。またゾンバルトの射程（田村信一「資本主義とエコロジー」『古典から読み解く経済思想史』ミネルヴァ書房、2012）などを見なかった。c. 歴史学派というくりの再吟味がなかった。シュモラー論の弱さゆえか。Cf. 田村信一のシュモラー研究、トライブのヴェーバー講義理解（『経済秩序のストラテジー』ミネルヴァ書房、1998）。

（池田 幸弘）

## 関西部会

第 162 回例会

日時：2012 年 7 月 21 日（土）13:00～17:45

会場：岡山大学

第 1 報告

林直樹（京都大）

「ミクロの哲学者—ヘンリ・ベーカーと 18 世紀自然哲学—」

司会者 中澤信彦（関西大）

討論者 生越利昭（兵庫県立大名誉教授）

一般に、歴史研究者が 18 世紀（以前）の思想にアプローチするに際しては、宗教、形而上学、政治、そして経済といった諸要素間の相互連関を見失わないことが肝要だと思われる。それらの要素が互いに緊密な関係性を保っていた時代にあって、そこに生きた

人々の思想と行動を彼ら自身の意識の文脈に即しつつ明らかにするという方法は、社会思想史の研究手法として、そしておそらくは経済学史のそれとしても、有効と言えらるう。

本報告が目指したのは、18 世紀ブリテンが生んだ自然哲学者として 21 世紀の現在も王立協会の講義（Bakerian Lecture）にその名を残すベーカー（Henry Baker, 1698-1774）の人物と思想を紹介し、当時における自然哲学的思潮の一側面に接近することである。ベーカーは聴覚障害者の教師として身を立てたのち顕微鏡研究の道に進み、その業績ゆえに王立協会会員に選出された。彼はまたデフォーの末娘の夫としても知られ、晩年の義父と著述活動のうで協力関係を築いている。

報告では、まず 17 世紀オランダの自然哲学者ホイヘンスの著作がベーカーに与えた影響を考察した。悪徳が技芸の進歩に貢献するというホイヘンスの思想は、マンデヴィルのその先駆であると見られる。ホイヘンスから多くを継承したベーカーは、マンデヴィル同様、自負心が人間の社会生活上にもたらす効用に着眼しながらも、しかし理知による情念の抑制を強調する姿勢を貫いた。ただ、彼の言う理知とは、自然界における創造者の叡智の働きを前提とした「存在の階梯」に対する認識を意味し、進歩の著しい光学装置、とりわけ顕微鏡による微小世界のさらなる探究を通じて蓄積されるべき諸存在をめぐる経験知識の、将来に向けた増大と不可分なものであった。ベーカーによれば、人間を含む自然界の全存在はそれら固有の存続意義を有する。ロックの経験哲学を援用しながら、彼は時間の観念すら諸存在各々の立場からして同等に知覚されるべきものと論じた。

第 2 報告

西本和見（名古屋大）

『社会的選択と個人的評価』出版前後の K. J. アローとシカゴ大学」

司会者 鍋島直樹（名古屋大）

討論者 廣瀬弘毅（福井県立大）

本報告では、1951 年に初版が出版された K. J. アロー(1921—)の『社会的選択と個人的評価』（以下、SCIV と表記）の執筆に至るまでに辿った経歴や、彼をとりまく知的環境に注目し、彼の経済学者としての初

期時代と SCIV の執筆経緯を明らかにした。

SCIV 執筆前後のアローの経歴は、(1) 幼少時代(～1936 年)、(2) ニューヨーク市立大学時代(36 年～40 年)、(3) コロンビア大学時代[1](41～42 年 10 月)、(4) 気象局時代(42 年 11 月～46 年半ば)、(5) コロンビア大学時代[2](46 年半ば～47 年 3 月)、(6) シカゴ大学コウルズ委員会時代(47 年 4 月～49 年 7 月)に分けられる。これにしたがって、SCIV の源流は 3 つ挙げられる。

第 1 は、A. タルスキから論理学を学んだニューヨーク市立大学時代である。ここでアローはタルスキの『論理学入門』の英文校正に関わり、関係論理の基礎を学んでいる。

第 2 は、コロンビア大学時代[2]のヒックス『価値と資本』と 46 年秋の大学でのヒックス講演である。ここで彼は多数決投票のパラドクスに思い至っている。

第 3 であり、直接の SCIV 執筆のきっかけは、シカゴ大学コウルズ委員会時代にある。この時期にアローは、J. マルシャックのもとで研究員としてシカゴ大学に赴く機会を得ている。その傍らアローは 48 年夏からランド研究所との間に一時雇用関係を結んだ。アローは、そのランド研究所で SCIV の直接的な着想を得ることになる。それは異分野の研究者との刺激的な知的交流の中のひとつである 0. ハイマーとの談話であった。

また、当時のアローの思想は、コウルズ委員会に間接的に見ることができる。コウルズ委員会は 0. ランゲに代表される市場社会主義に彩られている。マルシャックもまた市場社会主義の思想を強く持っていた経済学者であった。SCIV がこうしたコウルズ委員会の環境の中執筆されたということは、同書がシカゴ大学にありながらいわゆる「シカゴ学派」の印象とは異なって市場機構の不完全性を射程に入れた思想的環境から生まれているということを示している。

#### 合評会

坂本達哉『ヒューム 希望の懐疑主義』(慶應義塾大学出版会)

司会者 篠原久 (関西学院大)

討論者 竹本洋 (関西学院大)

本書は前著『ヒュームの文明社会』(1995)を挟んでここ 30 年間に公表された 9 つの論文に加筆修正をほどこしてなった論文集である。新たに書き下ろされた序章において、本文全体にわたる主題の統一性とヒューム研究の現代的意義とを明らかにする努力が払われているが、その意が余って文体も論述も本文とは趣を異にして高調である。練られたであろう書名は、『ヒューム社会論集』といった素直なものであっても本書の価値は損なわれなかったし、かえって本文の「初期覚え書き」に関する考証や経済論に対する独自の解釈などは、賛否を別にして読者に直截に届いたであろう。

耳目をひく「希望の懐疑主義」の「懐疑主義」とは、「神なき世界」という思想的現実のなかで、「ぎりぎりの歴史的選択として、特定の秩序や制度を選択せざるをえない人間の運命」を切り拓く方法であり、それに「希望」を託しうるのは、その方法を駆使する能力が「人間本性」にそなわっていると「楽観」しうるからである。神なき世界的方法的パイロットであるこの希望の懐疑主義は、前著の前望的な「文明社会」論とも同調するものではあるが、ヒュームの同時代人のルソーやスウィフトなどがすでに「文明の野蛮」に目を凝らしていたこと、その後の近現代の文明社会が負わなければならなかった深刻な経験の数々、さらには現に国の内外で人々が身に刻んでいる悲惨な体験に刮目すれば、「勤労、知識、人間性(自由と徳)」の順循環を説く著者の文明社会論は一面の強調に傾きすぎており、むしろ上の三つのものの裂け目あるいは断層にこそ現代の思想的問題が露呈している。それは絶望の深淵を覗くというのではない。試行錯誤の累積過程に基盤をおくヒュームの「コンベンション」は、希望や絶望といった無窮の価値を容れる詩(神)の世界ではなく、希望も絶望も情念に薄めて野心や失望などに変質させてしまう混沌とした現実で機能するものである。それゆえ希望や絶望はコンベンションとは無縁なものだし、懐疑主義とも拮抗するものではない。だから親和もできない。

18 世紀と現在とを神なき世界や希望の懐疑主義の枠組で直結する著者の思想的歴史認識も、一神教的思想風土をもたない日本人にはとりわけ率直に響くであろうか。日本の市民社会論の伝統を尊重するという著者は、明治以来の日本人がいまなお抱える政治アパシーの病理を根治するには、ヒューム(など)の古

典に学んで「西欧の自由主義、民主主義、共和主義の精神」を「真に獲得する」ことが必要だという。この手本と学習という啓蒙的な処方箋を守れば、われわれは「健康体」になれるのだろうか。過去にも類似の処方箋がいくどとなく与えられたが、効き目が薄かったのは、患者（国民）の学習が足りなかったせいだろうか。

著者の文明社会論に新たに加えられた中流論と文体論（エッセイ論）、そしてそこから導出される「真の中流の学」としてのヒュームの「社会科学の誕生」（副題）の問題提起は意欲的で魅力的でもあるが、分析の素材とされた二つのエッセイのテクストクリティークを含めてつめるべき点が残されており〔当日配布の評者のレジュメで一部を指摘した〕、今後いっそう周到な展開が望まれる。ヒュームにあって一つの社会科学が、どのような内容と意味とをもって誕生したのか。その社会科学は、「社会」に関する諸論の集合体であったのか、あるいは個別学問たとえば政治学や哲学や物理学と原理的に一線を画すべきメタ科学であったのか。そうした根本的な疑問を誘発する力を本書は有している。

討論者 森直人（高知大）

本報告では、本書の内容を概括し二点の問題提起を行った。ここでは紙幅の関係上、主に第一の問題提起を紹介する。ヒュームに「神なき世界」の思想を見る本書の核心の一つは、第2章の正義論にある。しかし彼の道徳論に神が存在しないとしても、それは「神の法の…存在理由そのものを消滅させた」ことになるだろうか。神なき道徳論と、神なき世界を支えうる道徳論の間には差異があるように思われる。また著者は、「例外的事態」における正義の停止、国家による法を超えた行動は「キケロー以来」の「人類思想共通の根本前提」、「古今東西のあらゆる国家権力が同じようにとってきた行動」だとして、ヒュームにおける正義の停止の議論を論点から除外している。しかし「神なき世界」の思想という革新性の強調は、一部のみ取り出せば他と共通に見える思想内容であっても、その思想的基盤まで掘り下げた再検討を要求するように思われる。すなわち特定の神の存在を前提に論じられた国家の不正の容認の論理を、彼が「神なき世界」にまで解き放ったことの問題性が議論されるべきではないだろうか。神の消去は、少なくとも見かけ上、西欧思

想の固有の文脈を越えた普遍的妥当性をヒュームの文明社会論に与える。非西欧世界を巻き込みながら恣意的な「例外的事態」が多発する近代の文明の問題状況を見ると、この論点は看過されうるだろうか。

本報告では第7章の共和主義理解についても問題を提起した。詳細は省略するが、アリストテレスからヒュームに至る諸思想を総合する本書の共和主義の概念規定には、始点であるアリストテレス『政治学』との齟齬があるように報告者には思われる。またこの規定は、ヒュームを共和主義の継承者とし、「西欧の自由主義、民主主義、共和主義の精神」を「すべて体現したヒューム」像を導く企図を持つようにも思われるが、これは厳密なテクスト読解という著者自身の要求と整合するだろうか。

著者リプライ 坂本達哉（慶応大）

今回の新著で私は、前著『ヒュームの文明社会』（1995年）の「文明社会論」という枠組みを継承しながらも、その細部を文献実証的に掘り下げるとともに、ヒューム思想の全体をヨーロッパ思想のマクロな系譜の中に位置づけることを試みた。本書は過去30年間に書かれた諸論文を大幅な加筆・修正を加えて一書に編んだものであるから、そこに編集上の無理が生じた面は否定できない。しかしながら本書は、正義論、経済論、政治論を柱とするヒューム文明社会思想の基本構造に即した展開を目指しており、最低限の一貫性を確保しようとしたつもりである。そこには、欧米の最新の研究動向の影響とともに、本書で附論的に検討した日本の「市民社会」論の隠微な影響もまた作用したであろう。そのどちらにより多く着目するかによって、本書に対する評価もまた変わってくるように思われる。

報告者のお二人はそれぞれ大部のレジュメを用意されたが、発表では一部の論点に限定された。竹本洋会員は私の「中流」論を取り上げ、森直人会員は正義論と共和主義論に焦点をしばられた。いずれも、技術的な面と本質的な面との両面にわたる貴重なご指摘であり、著者としては大いに教えられた。同時に、拙著の主要論点であるヒューム経済論についてはともに言及されなかった。私のリプライはいずれの論点についても十分適切とは言いがたいものだったし、三人の議論がうまくかみ合ったとは言えなかったように思う。これは何よりも、ヒューム解釈におけるお二人

と私との微妙なズレのためであろうが、同時に、学史・思想史研究の方法や意味についての三者の考え方の違いの結果でもあったように思われる。そこには、三者が属する各研究世代の学問観の違いすらも、微妙に反映されていたように思う。いずれにしろ、このような貴重な合評会の場を設けていただいた関西部会とお二人の報告者にあらためて感謝申し上げたい。  
(新村 聡)

## 西南部会

第113回例会

日 時：2012年6月30日(土)13:30～18:00

場 所：尾道市立大学

参加者：15名

### 第1報告

川脇慎也(九州大学)

「D. ヒュームにおける社会秩序論の展開—『政治論集』における租税・公債論との関連で—」

ヒュームが『政治論集』で披瀝した文明社会論、租税論、および公債論では、社会秩序と統治組織の存続が問題とされる。本報告の目的は、ヒュームが『人間本性論』において社会秩序の問題を『政治論集』でいかに継承・具体化したかについて、彼の租税論および公債論を中心に明確化することである。

『人間本性論』においてヒュームは、社会的利益は概して私的利益にもなることを明らかにし、社会的利益の擁護・促進を一貫して人間本性に基礎づけた。この意味で、『人間本性論』で開陳されたのは、社会秩序の形成・維持を抽象化した一般理論である。こうした一般理論を、より具体的な場面、つまりブリテンの名誉革命後の現実を視野に収めながら具体化することが『政治論集』の主要な目的の一つであったように思われる。

当時のブリテンにおいて、主として「勢力均衡」政策に起因する公債累積の問題と逼迫する財政の改善が急務であった。ヒュームによれば、過剰な「勢力均衡」政策の財源を公債によって賄い続けられれば、国民に多大な負担を強制することになり、「勤労」「奢侈と生産技術の洗練」「知識」「自由」を不可欠の環とする「文

明社会」の論理そのものが崩壊する。他方、財政再建と国内経済の発展にのみ注力し、国際秩序の安定化を疎かにすれば、統治組織そのものが破壊され、国民は他国に隷属することになる。『政治論集』においてヒュームは、社会秩序の安定化の問題を「国家の偉大さと国民の幸福」とを相互に増進する「文明社会」の論理と結びつけて捉え直し、「文明社会」の「一般的な成り行き」の促進によってブリテンが直面していた財政危機を乗り越え、統治組織を維持し、社会秩序を安定化させることを展望していたように思われる。更には言えば、ヒュームは「文明社会」における社会経済の発展と統治組織の円滑な働き・社会秩序の安定化とを相互促進的な関係にあると理解していたように思われる。

### 第2報告

平方 裕久(九州大学)

「メジャー政権の競争と管理の経済思想：経済・社会政策の展開から」

本報告の目的は、1990年代初頭のイギリス・メジャー政権の経済・社会政策を歴史的展開のなかで検討し、その独自の経済思想を解明することであった。

サッチャー政権は、市場を効率的に作動させるために、その阻害要因と見なした政府や労働組合の役割に制限を課し、社会サービスにおいても民営化や準市場の導入を行った。メジャー政権では、サッチャー政権の政策を継承・強化するなかで生まれた格差の是正や勤労貧困層の支援強化にも目が配られるようになった。とりわけ職能資格取得や公共サービスにおいて、達成すべき目標が設定され、それらの評価・査定を通して実績を「管理」する手法が導入されるようになったことは注目に値する。

サッチャー政権以降の経済・社会政策は、競争の強化による適切な資源配分の達成が目指され、「競争志向の経済思想」に基づいていたと理解することができる。メジャー政権は、市場競争を重視しつつも、目標設定や実績評価によって国民のインセンティブの喚起や競争の働かない公共サービスの質的向上が可能になると考えた。このような考え方は、「管理の経済思想」として捉えることができるように思われる。つまり、公平な競争を維持・促進するためには、実績を

評価し管理・監視することもまた必要になると考えられるようになったとすることができる。

こうしてみると、メジャー政権の政策は、サッチャー政権以来の競争志向の経済思想に加えて管理の経済思想という新しい考え方に支えられていたと理解できる。この考え方はニュー・レイバーの政策においても継承され、より厳格な評価制度が実施されるようになった。メジャー政権は、経済主体の自助努力を促すために評価や管理を実施し、政府の役割はそれらを補完することに限定した。ここにサッチャー政権からの飛躍だけでなく、ニュー・レイバーの萌芽をみることができ、両政権の結節環としての役割を果たしたことが確認される。

#### 合評会

D.K. フォーリー著『アダム・スミスの誤謬』について

討論者 亀崎 澄夫 (広島修道大学)  
佐藤 滋正 (尾道市立大学)  
中川 栄治 (広島経済大学)

著者は、どの偉大な経済学者の理論も科学性（経済余剰を創り出す市場の論理の解明など）と神学性（市場の論理を「良きこと」とする価値判断や社会観など）の両義性をもつと主張する。この両義性が生じるのは、経済学が、私利追求などの明確に規定された行動規範をもつ経済領域を、雑然とした確定性のない政治・道徳などの社会領域から切り離し可能とする考えを基礎としているからである。著者のいう「アダム（・スミス）の誤謬」とは、上の二つの領域が切り離し可能であるとする経済学の思考法にある。偉大な経済学者たちの諸理論は、社会のこの二元論的な見方に折り合いをつける試みであった。

著者によれば、アダム・スミスは、上のような考察方法を創始したわけではないとしても堅固なものにした、そしてスミスは、明確な経済法則の存在を想定して、それへの順応に力点を置くことによって、例えば、事実上、労働生産性向上の短期的な直接的効果としての失業という犠牲を、低生産物価格という抽象的恩恵獲得のための助けとみることになるような、道徳的・社会的・政治的諸要素等への十分な配慮を欠いた側面を持つ議論を展開することとなった、とされる

（中川）。

第2章および第4章について佐藤は、「成長の限界という妖怪」が出現してきた19世紀におけるマルサスの「道徳の危機」への恐怖と資本主義の成長と静止へのリカードウの着眼、また1860年代以降の新古典派における「市場」の絶対化とヴェブレンのシニシズム、これら各時代の難問にどれだけ自覚的でありえたかという視座から一貫して描き上げられた「経済学史」であると、本書の意義を紹介し、また用語および節別構成の改善余地も指摘した（佐藤）。

著者は、マルクスの資本主義的搾取・蓄積理論とプロレタリア革命論との関係に、「アダム（・スミス）の誤謬」を見出している。資本蓄積が搾取率を無制限に上昇させ階級的緊張を絶えず高めるという経済理論と、資本主義の根本矛盾に本気で立ち向かうのを控くという理由で改革志向的な労働者の政治運動への強い反対とは、マルクスに「誤謬」から生じる重大な問題を引き起こした、と（亀崎）。

（岩下 伸朗）

## 国際学会

### 国際学会情報

開催日時を基準として、最小限の情報を掲載しています。募集や参加などをすでに締め切ったものもあります。最新の情報についてはURLなどで確認ください。

#### ●21-23 February 2013

12th Conference of the Italian Association for the History of Economic Thought (AISPE) “Facts and thought in economic history and history of economics”, University of Florence, Florence, Italy.

<http://aispe.econ.unito.it/>

#### ●8-10 April 2013

The 1st Conference Herbert Simon Society “BOUNDED RATIONALITY UPDATED: Slow and Fast Thinking, Creativity and Rational Expectations”, New York University and Columbia University, New York, USA.

[http://www.fondazionerosselli.it/User.it/index.php?PAGE=Sito\\_en/attivita\\_speciali1&spec\\_id=39](http://www.fondazionerosselli.it/User.it/index.php?PAGE=Sito_en/attivita_speciali1&spec_id=39)

#### ●April 2013

The 2014 HOPE conference “Market Failure in Context”, Duke University, North Carolina, USA.  
<http://hope.econ.duke.edu/node/542>

#### ●16-18 May 2013

The 17th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought, Kingston University, London, UK.

<http://www.eshet.net/conference/index.php?p=38>

#### ●3-6 July 2013

26th Annual Conference of the Eighteenth-Century Scottish Studies Society & The International Adam Smith Society, University of Paris, Sorbonne, France.

<http://www.ecsss.org/meetings.htm>

#### ●4-6 July 2013

26th Annual Conference of the History of Economic Thought Society of Australia, The University of Western Australia, Perth, Australia

<http://www.business.uwa.edu.au/research/conferences/hetsa>

#### ●3-4 September 2013

Joint ENPOSS/PSSRT Conference, The European Network for the Philosophy of the Social Sciences and the Philosophy of Social Science Roundtable, University of Venice Ca’ Foscari, Venice, Italy.

<http://enposs.eu/>

## 追悼

杉本俊朗 会員

半世紀以上にわたって本学会の会員だった杉本先生が、2012年9月27日に亡くなられた。10月1日には100歳の誕生日を迎えられるはずであった。

武蔵高校の時代から「本が好きで」、90代になられても書誌への関心と本の蒐集への意欲は衰えるところを知らず、藤沢片瀬のご自宅は廊下の両側にまで本が積まれていてその間を縫って歩くさまで、さすがの先生も買ってきた本をまずは庭の植え込みに隠してから素知らぬ顔をして帰宅し、奥さんの迷惑顔をそらしたりされたという逸話が、告別式で披露された。

進学した東京帝国大学では大内兵衛ゼミで学び、学生時代から中国事情などの論文を発表、東洋経済新報社に就職、その後財団法人世界経済調査会研究員となったが、1942年には「日本変革の理論的準備をしていた」というので拘留されたこともある。戦後は金融問題などの研究論文、ソートン『紙券信用論』の邦訳（渡辺佐平氏と共訳）を発表、東海大学教授、横浜国立大学教授などを歴任した。

先生は、多数の邦訳を手掛けられたが、中でも大月版『マルクス・エンゲルス全集』（全41巻+補巻4+別巻4）では、ほとんどの巻で邦訳に加われ、多くの巻（8, 12, 22, 23a, 23b, 24, 25a, 25b, 補巻3）では巻統一者を担当、また『リカード全集』の第V巻（議会の演説および証言）及び第XI巻（索引）の監訳者になられ、学界に大きな財産を遺された。

先生の学界への貢献は、書誌学の分野でも大きかった。戦後の社会的混乱で各研究機関が研究資料の入手に困難を極めている中で1951年に結成された「経済調査資料協議会」（のちに「経済資料協議会」と名称変更）に参画され、会則が制定された1968年には初代会長に就任された。この協議会は1956年に『経済学文献季報』を発刊したが、「この文献季報の編集と刊行にあたっては、予想以上の労力と時間を費やした」という刊行のことばを書いたのは杉本先生であった。この季報は、残念ながら、2001年の176/177号が終刊となったが、多くの経済学研究者がこの季報にお世話になったことであろう。

筆者は、横浜五大学連合学会（のちに六大学）で先生とご一緒するようになり、その縁で『リカード全集』XI巻の翻訳のお手伝いをさせていただいた。先生からお話を伺うのは楽しくて、著名な経済学者などに実はこんな失敗談があるのだなどと話されるときは先生も楽しそうだったが、しかし話される眼はいつも温かく、学者も人間であっていいのだと語られているようで心が安らいだ。謹んでご冥福をお祈りします。

（千賀 重義）

羽鳥卓也 会員

「羽鳥先生の『最後の仕事』」

羽鳥卓也先生は2012年12月17日早朝、90歳の天寿を全うされ、旅立たれた。先生が専門とされたミス、リカードゥ、マルサスを中心とする奥深い理論的研究は古典派経済学の世界のみならず、戦後日本の経済学史研究の基本的共有財産になっている。

先生の研究に対する情熱は息を引き取る瞬間まで決して尽きることはなかった。先生の最後の仕事は「マルサスの戦後不況論」（羽鳥卓也・藤本建夫・坂本正・玉井金五編著『経済学の地下水脈』晃洋書房、2012年）である。ご高齢に加えて60歳代で紫斑病に襲われたことによる足腰の衰えと不自由な視力、この体力的ハンディキャップの中でこの論文は書き上げられた。

2010年7月8日付の手紙のなかで、先生は体調不良の日々が続くと「生きているということ自体が容易ではない」が、それでも「心残りがいいわけではありません。『ナポレオン戦後の不況についてのリカードゥ・

マルサス論争』というテーマを設定して従来の研究水準を少しばかり超えることができるのではないかと」という見通しから『リカード全集』と『マルサス著作集』を読み返していると書かれている。

それから半年後に「マルサスの戦後不況論」の第一次草稿が私の手元に届いた。その添え書きに、「論説としての出来栄は、自分でも、分析は甘く、理論的掘り下げは浅く、我ながら物足りない議論に終始したものにすぎませんが、それでも、Malthus と Ricardo との論争内容については資料が豊富で、随所に長文の引用をしているので、読み物としては従来の同じ論題を扱った研究成果よりは内容豊富になったのではないかと思います」と。

私はこの原稿を読み大いに感銘を受け、直ちに岡山大学時代に先生の薫陶を受けた兄弟弟子の坂本正、玉井金五両君に連絡をとった。先生の論文を中心に、これまでの弟子としての非礼を詫び、加えて先生が卒寿（9月23日生まれ）を迎えられるので、本にして出版する計画をたてた。晃洋書房の丸井清泰氏からも賛同を得られ、ただちに作業に取り掛かった。両君とともにそれぞれの寄稿を準備しつつ、先生とは電話で出版について何回か相談をし、2012年3月18日には晃洋書房に入稿することができた。この間、そしてその後も先生は推敲に推敲を重ねられ初校から再校までは朱を自ら入れられたが、第3稿の校正についてはすでに余力は十分ではなかったためか、私に委ねられた。

5月10日の夜、先生より電話があり、腰の痛みが余りにも激しいのでその痛みを除去するために近々入院して手術の予定で、「君との電話もこれが最後となるかもしれない」と告げられたが、まさかと思った。そしてその翌日、晃洋書房から責了の連絡があり、5月29日に待ちに待った『経済学の地下水脈』が届いた。翌30日、先生の手術が無事成功したとの知らせが先生の御子息からあり、また先生とは話をする機会は結局訪れることはなかったが、先生が本の完成を非常に喜ばれていたと奥様や御子息から聞き、何とか間に合ったと弟子たち3人は安堵の胸をなでおろしたことであった。

その後先生はリハビリ病棟に移られたが、院内感染なども重なり身体はますます衰弱し、病院からは老衰との診断を受け、12月14日介護付き老人ホームに移り、そして17日早朝息を引き取られた。近親者のみで告別式が行われたが、御子息の話によると、亡くなる前にもう一度伊東光晴氏のケインズが読みたいとおっしゃっていたので、同氏『ケインズ “新しい経済学” の誕生』（岩波新書）が旅立ちの友に添えられたとのことであった。

先生は「マルサスの戦後不況論」の末尾で、リカード・マルサス論争におけるケインズの見解を念頭に置きつつ、マルサスは兌換停止のもとでの単なる通貨の増刷で不況からの脱出が可能になるのではなく、「兌換再開による国内通貨の安定と為替相場の安定」をはかるべきだと主張したと結論づけられたが、そうだとすれば、先生の次のテーマはケインズのマルサスの読み方如何となり、先生はあの世での研究のテーマをこの世での最後の論文で再確認されたに違いない。

合掌

（藤本 建夫）

## 編集後記

『経済学史学会ニュース』41号をお届けいたします。代表幹事としての最後の編修後記です。この2年間、大会開催校の問題で会員の皆さまが心を痛める状況をつくりだしたことを改めてお詫びしたいと思います。幹事会報告で記しましたように、この問題を検討した組織検討ワーキンググループの答申が幹事会に提出されました。答申の内容は、別途、皆さまにお知らせすることにいたしました。ワーキンググループのメンバーの真摯な活動に感謝するとともに、幹事会では、今後活かしてゆくために、答申の内容を十分に検討することが決定されたことをご報告いたします。

開催校問題に関して、抗議の退会者を出したことについては、代表幹事としての私の責任を痛感しておりますが、それとは別に、会員数が趨勢的に減少してきていることも否めません。また、幹事会報告にも書きましたように、『経済学史研究』が従来受けてきた科学研究費からの助成金のシステムが大幅に変更されました。このような状況において、経済学史学会が会員の研究発表の機会を保障し、会員相互の交流を深めてゆくために何をしたらよいか。さらに、社会に開かれた学会にするにはどうしたらよいか。検討すべき課題は山積していると思われまます。これまでの会員の皆さまのご協力に感謝するとともに、堂目卓生新代表幹事のもとで、より充実した学会になるように、皆さまのさらなるご協力と積極的なサポートをお願いしたいと思います。

(栗田 啓子)

経済学史学会では下記のホームページとメーリング・リストを運用しています。

- ・ホームページ

<http://jshet.net/>

- ・メーリング・リスト

現在約450名の会員の方が参加されています。アドレスをお持ちの方は、ぜひご参加ください。参加希望の方は、企画交流委員会 (admin[at]jshet.net) にご連絡ください。

---

『経済学史学会ニュース』第41号

2013年1月30日発行

経済学史学会 代表幹事 栗田 啓子

事務局 〒167-8585 東京都杉並区善福寺2-6-1

東京女子大学 栗田啓子研究室

TEL : 03-5382-6310

E-mail : keikurita[at]lab.twcu.ac.jp

連絡先 学協会サポートセンター

〒231-0023 横浜市中区山下町194-502

TEL : 045-671-1525 FAX : 045-671-1935

E-mail : scs[at]gakkyokai.jp

---

## 経済学史学会創立60周年記念事業出版物

### 『古典から読み解く経済思想史』ミネルヴァ書房、2012年

序章 古典から読み解く経済思想史	井上琢智
第1部 市場・政府・中間組織	
第1章 社会、市場、および政府—アダム・スミスの総合知—	堂目卓生
第2章 グローバル化と貨幣—ジョン・ロックからベン・バーナキンへ—	若田部昌澄
第3章 市場の倫理の論じ方—カーネギー、クラーク、ナイト—	佐藤方宣
第4章 19世紀転換期における「アソシアシオン」の展開 —シェイソン、ゴダン、ジッドを中心として—	栗田啓子
第2部 資本主義・エコロジー・環境	
第5章 資本主義とエコロジー—ゾンバルトの近代資本主義論—	田村信一
第6章 戦間期メンブリッジの経済学と資本主義観 —ケインズ、ロバートソン、ホートリー、ピグー—	平井俊顕
第7章 イギリス経済思想における穀物—ステュアートからオールまで—	服部正治
第8章 経済学は環境をどう捉えたか—ピグー、制度派、エントロピー—	岡 敏弘
第3部 生活・福祉・教育	
第9章 労働と賃金—アダム・スミスの分業論と高賃金論—	新村 聡
第10章 究極の安全を求めて—ベヴェリッジにおける理想社会—	小峯 敦
第11章 少子化とワーク・ライフ・バランス—ミュールダールの人口論—	藤田菜々子
第12章 「学問のすすめ」の社会・経済思想—スミス、ミル、福沢—	坂本達哉
おわりに	井上琢智

本書を積極的に教科書・参考書として学生にご案内いただくとともに、生活協同組合等にも宣伝いただき、書店に品揃えの依頼をお願いいたしたく存じます。